

■ 書評 ■

『誰も知らない野生のパンダ』

小林達彦著, 経済界, 2005 年 12 月, 206 頁, 本体価格 1600 円

思えば、刊行からすでに6年も経過した書籍を、2011年の正月、初めて手にしたこと自体、運命的なものが存在したのだろう。まず、この年の3月11日、東日本大震災により、その先月に中国政府から贈られたジャイアントパンダ（以下、パンダ）雌雄2個体の公開日を遅らせることになった。けれど、その遅延は当初予定されたもののわずか数日後であった。受け入れた東京都上野動物園も、震災日直後から計画停電や物資不足などの影響で休園をしていたが、このような時こそ、国民を鼓舞したいという動物園人の心意気と想像された。ただでさえ手のかかる新着動物（パンダに限らず）に加えての非常時。関係各位は言い尽くせぬご苦労をされているはずだ。まず、このような状況へ果敢に挑みかかる動物園人に敬意を表したい。

ところで、評者は彼らと動物の健康管理を通じて一緒に仕事をしているので、ある程度わかったつもりでいるが、動物園人は、まず対峙する動物に分け隔てなく接する。が、社会一般は日中外交問題・経済的波及効果から、文字通り「人寄せパンダ」的なポピュラリズムまで、パンダにまつわるモノは複雑多岐である。一方、本書では、それらを剥ぎ取り、無邪気にパンダを愛でていた。本文は次のような随筆風の小題の6章により構成される：竹林での邂逅；パンダは究極のサバイバー；春四月、パンダの求愛；夏八月、パンダの出産、そして子育て；いま、パンダに何が起きているのか；ふたたびパンダに会う。また、各章末尾には、ファイルと名付けられたコラムがあり、キンシコウ（著者はこのサル類を追いかけているうちにパンダと出会ったというだけあって、詳細に触れられていた）、キンケイ、トキ、ターキン、タケネズミ、レッサーパンダが扱われていた。軽妙な文章はとてわかり易いし、著者がNHK科学番組制作者ということで写真も見事であった。「このような目論見が成り立つのもパンダならでの特性だから

さ」という皮肉屋も、こういった写真を一瞥するだけで沈黙するだろう。評者も野生動物医学（とくに寄生虫病）の専門家として、これまで中国（この本で登場する各省フィールドや西安・林業庁野生動物保護協会含め）に何度か訪問したが、距離的に近い場所に野生パンダが生息していたことを知ってしまい悔しい。

このように、本書に触発され、いざ野生パンダの生き様を見てやろうとなっても、現状では難しいであろう。本書p202で言及されているようなパンダ保護区内でのエコツーリズムが期待されるが、まだまだ先の話であるし、生態学分野でパンダを対象にしている日本人を知らない。なお、飼育下パンダを対象にした研究業績はある。たとえば、CiNii（国立情報学研究所論文情報ナビゲータサイニィ）で「パンダ動物」をキーワード検索すると、解剖、生理、内分泌、人工繁殖など12件がヒットした。とくに、最近では寿命が付き、パンダの遺体を調べ尽くした国立科学博物館（現・東京大学）の遠藤秀紀氏らの仕事がある。本書のタケを餌資源に適應して行った形態・機能の記述（p.61）では、是非、彼の仕事は引用して欲しかったが…。なお、一定植物のみを食らい（そのため特殊な消化機構が進化したのだが）、人寄せ効果では双壁をなすコアラについても検索をしたが、論文数は10同程度と判明した。しかし、初出が1934年と古く、しかも特異的なウイルス感染やクラミジア症など疾病事例関係が多いのが、パンダと比較してのコアラ研究の特色であった。だから、本書の病気関係は雑なのか、p.169「鳥インフルエンザは……原因不明でかかると必ず死ぬ」という表現は問題あり。この疾病はこの書籍が刊行される前年に発生もしており、十分な情報が容易に入手できたはず。この国を代表する放送局の看板番組を作る立場として、こういった面にもご配慮頂きたかった。（浅川満彦／酪農学園大学）